

二つの現実

—リアリティとアクチュアリティー—

木下 聖三

目次

1. リアリティはアクチュアリティーによって支えられている
2. 存在はリアルな述語ではない
3. バーチャリティから捉え返す現実
4. 触覚信仰と現実の文法
5. アクチュアリティーの問題次元

1. リアリティはアクチュアリティーによって支えられている

現実には二つの様相がある。一つは誰が見てもそうであるような（いわば客観的な）「現実」、もう一つは人の数だけ存在するような（いわば主観的な）「現実」である。両者を混同すべきでないというのが、（前者をリアリティ、後者をアクチュアリティーと呼び直す）「リアリティ／アクチュアリティー」論である。

木村敏によって人文学一般に導入された両概念は、近年、石井美保や村松彰子らによって、呪術論に応用されるに至っている（木村「リアリティとアクチュアリティー」[2001]、石井「呪術的世界の構成」[2011]、村松「アクチュアリティーの世界を生きる」[2010] など参照）。各論者とも、志向が受動的か能動的かによって両者を分けているが、客観的か主観的かによって分けても、両

者の違いは保存される上に、「現実」という言葉にもそぐうように思う。

ただし、主体という概念について、認識主体（≒主観？）と行為主体とに切り分け、前者を対象世界に送り返した上で、後者を保存するという（しばしばエージェンシー論やハビトゥス論などに見られる）作法に、無自覚的であってはならない。大体、「視振り」も「身振り」も同じく取り扱うべきなのである。「五体の動きを「体振り」と言うならば、視線の動きは「視振り」であり、声の動きは「言い振り」または「声振り」と言うことができよう。そして、五体、視線、声、はそれぞれ身の一部なのだから、「体振り」「視振り」「声振り」を合せて「身振り」と総称できよう」（大森「ことだま論」[1999a : 121]）。

とはいえ、同じ「現実」という言葉が使われ続けているのも故なきことではなかろう。主観的ならざる現実空虚であるし、客観的ならざる現実妄想到過ぎないのであって、混じり気のない純粋なりアリティや、混じり気のない純粋なアクチュアリティなど、実際には（？）存在しないのである。

いや、捕捉することが叶わないだけで、いずれも実は（？）存在しているのかも知れない。物自体とは純粋なりアリティのことであったのかも知れないし、純粋なアクチュアリティに至っては（客観的に確認され得ないとしても）、夢なり幻なりと呼び習わされてすらいるではないか。

完全なアクチュアリティはそれ自身のほかにはなんの結果も生まず、何物をも生産しない。そして完全なりアリティはそれ自身のほかにはいかなる目的をもたない。

（アーレント『人間の条件』[1994 : 392]）

しかし、物自体や夢幻は、やはり現実離れしてしまっていると言うべきだろう。

二つの様相の、いずれも備えているのでなければ、現実現実たりえない。大森莊蔵が「虚想の公認を求めて」というエッセイの中で、同じことを次のように説いている。

その後姿の想像なくしてはこの机は今現に見えているようには見えぬで

あろう。つまり、架空の世界の想像こそ現実世界を現実的たらしめているのである。この机はその背後の架空の想像をこめて今現にあるように立ち現われているのである。

(大森「虚想の公認を求めて」[1999a : 240])

大森は続けて、背後の架空の想像を「虚想」fancyと呼ぶことによって、(およそ客観的だと思われがちな) 現実世界の主観的な様相に焦点を絞っている。

机の現在ただ今の背面知覚的思いはこの現実世界の思いではなく架空の虚なる思いである。だがこの虚なる思いがこの実の世界で実の働きをする。すなわち、この虚なる思いがこめられていてこそ机の知覚正面はまさにこの机の実なる知覚正面であるのである(つまり、机は机として見える)。この虚なる思いの実の働きを「虚想」と呼ぶのである。

(大森「虚想の公認を求めて」[1999a : 241])

机のリアリティは、背面の「虚想」に支えられている。アクチュアリティとはまさに「虚想」の「実の働き」のことである。リアリティはアクチュアリティによって支えられているというわけである。

2. 存在はリアルな述語ではない

今少しリアリティとアクチュアリティという概念の異同を見定めるべく、木田元のマルティン・ハイデガー論 [1993 : 112-115] を参照することにしよう。というのも、木田によれば、かつてイマニエル・カントが区別し、しかしにもかかわらず、混同され続けたリアリティとアクチュアリティという概念は、ハイデガーによってこそ再構築されたからである。

ハイデガーが注目したのは、「存在はリアルな述語ではない」というカントの言葉であった。

以下、レール real は「リアル」、レアリテート Realität は「リアリティ」というように、表記を英語音に統一する。加えて、ウィルクリッヒカイト Wirklichkeit はその英語訳としてアクチュアリティ actuality を採用、この用語についても以下、英語音で表記することにする。

ここで、リアルという形容詞について通常宛がわれる訳語を採用すると、「存在は実在的な述語ではない」となり、よく意味が分からなくなる。この命題の意味を理解するためには、まず存在動詞と繫辞の違いに注意を払う必要がある。

木田は「ここに犬がいる」という文と「犬は四つ足である」という文を例示している。存在動詞「がある」(=「がいる」)と、存在動詞ならざる繫辞「である」とは混同されるべきでない。「犬は四つ足である」という文における「四つ足である」という述語が、まさに(主語概念の内容を表す)リアルな述語であるのに対し、「ここに犬がいる」という文における「がいる」という存在動詞は、(主語概念の内容を表す)リアルな述語ではない、というのである。

木村は、「がある」と「である」を区別する代わりに、私が等号で結んだところの「がある」と「がいる」を区別している(『偶然性の精神病理」[2001: 99ff])。木村は、存在動詞でも繫辞でもあり得る「ある」と、繫辞の機能を持たない「いる」を分けるのだが、(木村のように)「存在動詞+繫辞」と「存在動詞」という具合に分けるより、(私のように)「存在動詞」と「繫辞」という具合に分ける方が(木田の読むカントなりハイデガーなりに従っているという意味で)おそらく正統的であり、(何よりシンプルであるという意味で)正当でもあるのではないか。

言い換えれば、「四つ足である」という述語は、当の犬がそこにいようがいまいが、さらに言えば実在しようが実在しまいが、カントの用語法に従う限り、どこまでもリアルなのであり、対して、「ここに犬がいる」か否かは(リアルでなく)アクチュアルな問題なのである。したがって、「存在はアクチュアルな述語だ」と言うことは許されよう。

なお、ジル・ドゥルーズが「リアル」réel と「ポシブル」possible を対置している点は今は置

くが、カントの用語法からは逸脱しているのではないだろうか。ドゥルーズ御製の概念をも参照する場合には、たとえばスラヴォイ・ジジェクがそうしているように、「リアル」と「リアリティ」を区別するといった工夫を施す必要が出て来るだろう。

3. バーチャリティから捉え返す現実

それでは、バーチャリティという概念は、(四つ足の)リアリティや(存在の)アクチュアリティという概念とどう関わるのであろうか。館暲によれば――

バーチャル (virtual) とは……つまり、「みかけや形は原物そのものではないが、本質的あるいは効果としては現実であり原物であること」であり、これはそのままバーチャルリアリティの定義を与えているのである。あえて一言でいえば「現実のエッセンス」がバーチャルリアリティであるから「抽出された現実」とも言い換えられる。従って、日本語訳としてしばしば目にする、虚や仮想とは似ても似つかないどころか、むしろ正反対とさえいえる概念である。

(館「バーチャルリアリティとは何か」[2002:14])

バーチャルという概念が、少なくとも、直接知覚し得ぬ机の背面といった「虚想」を指示するものではないことを押さえない。

そもそもバーチャルはバーチュウ (virtue) の形容詞であり、しばしば「徳」と訳されるが、その物をその物として在らしめる本来的な力という意味をもつ。つまり、それぞれの物には本質的な部分があって、その本質を備えている物がバーチャルな物なのである。

(館「バーチャルリアリティとは何か」[2002:22])

「本質的な部分が引き出される」ということは「非本質的な部分が削ぎ落

とされる」ということでもある。バーチャルとは、その物がその物たるに不要な部分が削ぎ落とされたところの本質だ、というわけである。

もしも、現実世界を近似しつつして、すべての要素をもてば現実そのものになるわけだが、一般にはすべてをもつわけではないし、その必要もない。すべての要素のうち、その目的にとって重要な要素、すなわちエッセンスだけを抽出したものがバーチャルリアリティとなる。

(館「バーチャルリアリティとは何か」[2002:22])

「四つ足である」ことも「ここにいる」ことも、犬が犬であるための本質ではない。それらの要素を差し引いた後に残るエッセンスこそがバーチャルなのである。逆に言えば、エッセンスならざる要素も併せ持っているのが現実である。バーチャルな犬(犬という観念)に、「四つ足」性(四つ足を有していること)や「存在」性(ここにいること)を付与すると現れるのが、アクチュアルな犬だ、というわけである。

冒頭で触れた物自体や夢幻の領分を再度見定めるならば、物自体は純粋なリアリティでなく、むしろバーチャリティそのものであろう。対して、夢幻は依然アクチュアルな問題系に属していると思う。「夢は過去形で語るほかはない。夢から覚めて初めて夢を見たのである」[1999b:12]と大森が述べているように、その内容でなく、存在性(今ここにいること)こそが夢か否かを分けるポイントだからである。

4. 触覚信仰と現実の文法

改めて、机なり犬なりの本質ならざる要素をリアリティに、机なり犬なりの本質をバーチャリティに振り分けてみると、果たして、アクチュアリティの取り分が極めて心許ないように思えてくる。そこで、最後まで置き置かれるのは、触覚的な要素である。

大森も「さわるといことこそ現実性の核心だ」[1999b:10]と述べて

いる。触覚こそがアクチュアリティの要件だ、というわけである。さて、しかし、視覚や聴覚を差し置いて、本当に触覚だけが現実（リアリティ）に現実性（アクチュアリティ）を付与する特権を有している、と言えるのだろうか。

生理学的には、視覚や聴覚は「特殊感覚」、触覚は「体性感覚」に分類される（もろもろの感覚は、これに「内臓感覚」を加えた三種に大別される）。現実性付与特権の有るや無しやを論ずるに、こうした専門的な分類にこそ依拠すべきなのかも知れないが、ここでより一般的な呼称を使い続けたとしても、別段不都合は無いであろう。

館もまた、「タンジブル (tangible)」という言葉을挙げて、根強い触覚信仰に触れている。元々「触ることができる」という意味の、この言葉は、今や「実体的な」とか「明確な」、「現実の」という意味を持つに至っている。ここに「触ることができるものこそ現実的なもの」[2002:120]という信念を見て取ることができるというわけである。

館は続けて、触覚再現装置の可能性を論じている。その実現はなかなか難しいようだが、裏を返せば、論理的には触覚も再現可能だという話である。つまり、触覚もまた、再構成の可能な（リアルな述語によって表現できる）現実（リアリティ）に他ならないのである。

館の作業によって触覚の特権性が解体された今や、触覚を現実性（アクチュアリティ）の基準と見立てる大森のエッセイ（「夢まぼろし」[1999b:9-13]）は、触覚信仰の告白文という様相を帯びているように思えてくる。ただし、あらゆる民間信仰がそうであるように、これを迷信と呼ぶのは不適切、むしろ、これこそが「現実」の文法なのだ、と見るべきであろう。

5. アクチュアリティの問題次元

いざ、触覚的な要素もリアリティの海に投げ入れるならば、いよいよアクチュアリティの内容が無くなってしまふ。それもそのはず、アクチュアリ

ティとは、そもそも概念の内容ではなく、様相を表すメタ概念だからである。

無内容な、このメタ概念は、見ようによっては、世界からあらゆる存在者を取り払った後になお残る、世界大の概念である。「ハイデガーが人間のことを〈現存在〉という妙な言葉で呼ぶのも、人間こそ、〈存在〉という視点の設定がおこなわれるその〈現場〉だからにはほかならない」[1993：88]という木田の言葉に従うならば、アクチュアリティの無内容性は、すなわち人間の「現存在」性（世界が今ここに開かれていること）に他ならない。

このような問題は、人が「他ならぬ今」や「他ならぬ私」を言い当てようとする際にこそ、尖锐化する。「カントの用語法に従って」[2012：126]と明言する永井均が、次のように述べている。

現実の現在だけを「現在」と呼んで、他の、その時点におけるその時点は「ゲンザイ」や「ぼやけた現在」などと呼ぶなどという区別の仕方はできないにもかかわらず、その区別はやはり存在する。そこに存在するのは、そういうリアリティにかんする内容的な差異ではなく、ただもっぱらアクチュアリティにおける差異である。もちろん、私と他人の場合も同じである。現実の私だけを「私」と呼んで、他の、その人にとってのその人は「ワダジ」と呼ぶなどという区別の仕方は決してできないにもかかわらず、その区別はやはり存在する。そこに存在するのは、そういうリアリティにかんする内容的な差異なのではなく、ただもっぱらアクチュアリティにおける差異だからである。「実-虚」関係は、「自-他」関係に還元されないアクチュアリティの問題次元を示していると考えなければならない。それは、時間に関しては、A系列はB系列に還元されないアクチュアリティの問題次元を示しているということである。そして独我論の問題もまた、どこまでもリアリティには表現されえないアクチュアリティとは何か、という問題の一種であると考えなければならない。〔引用元におけるレアリテートやアクトゥアリテートといった言葉は、それぞれ表記を英語音に変更した〕。

(永井『ウイトゲンシュタインの誤謬』[2012:131])

「他ならぬ今」にも「他ならぬ私」にも、同じ「今」、同じ「私」という言葉が宛がわれているにもかかわらず、それぞれが依然として「他の今」なり「他の私」なりから区別され得るのは、いずれもが世界の内容に関する（リアルな述語によって表現できる）事柄ではないからである。

便宜上、「他ならぬ今」は特定の日時に書き換えられ、「他ならぬ私」は固有の名前に書き換えられるために、アクチュアリティの問題系は、リアリティの問題系に取り違えられ続ける。これは（触覚信仰同様）、おそらく生活の知恵なのだが、現実を対象化する際には、リアリティとアクチュアリティとを取り分ける必要があるだろう。

木村に先んじてルネ・デカルトのコギト概念を問題化した長井真理は、リアリティとアクチュアリティという言葉こそ使っていないが、これら二つの次元を（木村以上に明確に）区別し得ている。長井は、コギト概念のうちに「私には<私が…している>と思われる」という二重構造を見て取り、さらに<私が…している>という（能動態で言い表される）次元と「私には<…>と思われる」という（中動態で言い表される）次元とを峻別して見せるのである（『IX-三 非対称的・非措定的な自己関与—デカルトのコギトを手掛かりとした理解』[1991:191-195]）。主体と客体の成立する次元は、まさにリアリティのそれであり、中動態のコギトの次元こそは、アクチュアリティのそれである。長井は主体的（＝主観的）な残滓も余すことなくリアリティの海に投げ入れることによって、アクチュアリティの無内容性ならびに「現存在」性を浮かび上がらせている。

文献表

アーレント

1994 『人間の条件』（志水速雄訳）ちくま学芸文庫

石井美保

2011 「呪術的世界の構成—自己制作・偶発性・アクチュアリティ」春日直樹編『現実批判の人類学』世界思想社

大森荘蔵

1999 a 『大森荘蔵著作集4 物と心』岩波書店

- 1999 b 『大森莊蔵著作集 5 流れとよどみ』 岩波書店
木田元
- 1993 『ハイデガーの思想』 岩波新書
木村敏
- 2001 『木村敏著作集 7 臨床哲学論文集』 弘文堂
館暲
- 2002 『バーチャルリアリティ入門』 ちくま新書
永井均
- 2012 『ワイトゲンシュタインの誤謬—青色本を掘り崩す』 ナカニシヤ出版
長井真理
- 1991 『内省の構造—精神病理学的考察』 岩波書店
村松彰子
- 2010 「アクチュアリティの世界を生きる—当事者抜きの決定をめぐる」 小田亮編 『グローカリゼーションと共同性』 成城大学民俗学研究所グローバル研究センター